

からもその影響は大きい。

菊部 直

- 1 松本育子編『井上洋介図鑑』河出書房新社 (日本政治思想史)
- 2 津島佑子『ヤマネコ・ドーム』講談社
- 3 藤山宏『崩壊の経験——現代ドイツ政治思想講義』慶應義塾大学出版会
- 4 J・G・A・ポーコック『鳥々の発見——「新しいブリテン史」と政治思想』大塚元他訳、名古屋大学出版会

増田耕一

- 1 斎藤貴男『カルト資本主義』文春文庫、二〇〇〇年(単行本一九九七年)
- 比嘉照夫氏の「EM」が教育や行政に食いこんでいる問題の参考文献として教えられ、その限りでは有用な本だと思った。オカルト信奉やニューエイジ思想の系譜の情報も参考になるが、多くのものを一つの傘にまとめすぎだと思う。労働者を企業に奉仕させるしくみは今野晴貴氏が指摘する「ブラック企業」問題の側面でもあるだろう。
- 2 佐藤康雄『放射能拡散予測システム SPEEDI——なぜ活かされなかったか』東洋書店、二〇一三年

著者は気象モデルの専門家で引退後福島に住み被災者ともなった。二〇一一年の事故では発電所近くの放射線量の測定値が得られず(SPEEDI)は広域の線量を予測できなかった。国は放出量を仮定した計算はしたが、住民の避難の参考に即時伝える意志がなかった。わたしはむしろアメリカ軍による線量測定値が伝えられなかったことを残念に思った。

江守正多『異常気象と人類の選択』角川SSC新書、二〇一三年

地球温暖化は今後百年ほどの人間社会に重大な影響をおよぼすと予測されている。それに関する政策の議論は、温暖化をくいとめることを重視する立場と、経済活動を重視する立場とに分裂している。著者は、具体的政策の提唱からは一歩ひいて、温暖化のリスクと温暖化対策のリスクを比較評価するという議論の枠組みを提唱する。

立本成文編著『人間科学としての地球環境学——人とつながる自然・自然とつながる人』京都通信社、二〇一三年

二〇一三年三月まで所長をつとめた編者を含む総合地球環境学研究所の人たちによる論集。トランスディシプリナリティ(超学際性)という用語・概念についての複数(第2・5・8章)の論評が参考になる。また半藤逸樹氏が日高敏隆初代所長とともに提唱した「未来可能性」についても「持続可能性」

との違いが少しわかった。

セオドア・M・ポーター『数値と客観性——科学と社会における信頼の獲得』藤垣裕子訳、みすず書房、二〇一三年(原書一九九五年)

定量的測定値の重視と数学的理論化とは違う思想なのだ、と主張する本。一九世紀のフランスで費用便益分析をしたナヴィエなど土木局のまわりの人々と限界効用理論を発達させたワルラスたちとのかわりは薄かったそう。歴史のもしもだが、物理量を使う前者が数理経済学の主流になっていたらよかったのに。

斎藤成也

(人類学)

旦敬介『旅立つ理由』岩波書店、二〇一三年

以前機内でこのなかの「一番よく守られている秘密」を読んで、あまりの文のうまさと内容の魅力にうなりました。主題であるポツレは昔メキシコで食べて、気に入っていました。冒頭の「世界で一番うまい肉を食べた日」も、親子の関係をほのぼのと示す秀逸なエッセイ。挿絵もすばらしい。仕事に疲れると一章ずつ読んでほっとする、とてもステキな随筆本。

産経新聞社『新聞記者司馬遼太郎』文

富山一郎

(思想史)

春文庫、二〇一三年
金閣寺放火事件の第一報は司馬がてがけたことを知りました。新聞記者を忍者になぞらえていた彼だからこそ、直木賞受賞者が誕生したのでしょ。付録のコラムで茶道を馬鹿にしていろいろのおもしろい視点。新聞記者時代の膨大な蓄積があつた歴史小説家を生んだのですね。

小谷野敦『日本人のための世界史入門』新潮新書、二〇一三年

歴史において偶然が重要だという著者の指摘には、有限・偶然・時間をテーマに「すべては歴史なのだ」という視点を主張してきた私に通じる点があります。適者生存の考え方に対する疑問点にも拍手。

Masatoshi Nei, Mutation-Driven Evolution, Oxford University Press, 2013.

米留学時代の師根井正利先生が八二歳に

して発表した渾身の一作。出版直後に京都賞を受賞されました。進化においても重要なのは突然変異であることをいろいろな角度から立証しています。いずれ日本語訳がでると聞いています。

高城修三『日出づる国の古代史——その三大難問を解く』現代書館、二〇一一年

古代には現在の一年が二年だとされていたことを立証した上での記紀神代編の明快な立証。歴史学者のほとんどが実在を疑わない継体天皇からさかのぼって、崇神天皇即位を西暦二五六年と推定。すると卑弥呼は孝霊天皇のあの娘に自然とあてはまるのです。さらに考証は神武までさかのぼってゆきます。神話から歴史へではなく、神話は歴史なのです。

文化と社会を読む 批評キーワード 辞典

大貫隆史・河野真太郎・川端康雄(編著)
「自由」は「新自由主義」に至らざるを得ないのか? 21世紀を読み解くキーワード集。
四六判 400頁 ■2940円

新編 認知言語学 キーワード事典

辻 幸夫(編)
認知言語学とその関連領域の用語を分かりやすく解説する好評事典を大幅に増補改訂。
A5判 496頁 ■4515円

翻訳研究の キーワード

M. ベイカー & G. サルターニャ(編)
藤澤文子(監修・編訳)
伊原紀子・田辺希久子(訳)
英語圏で急速な発展を遂げている翻訳研究の世界を27のキーワードで読み解く。
A5判 312頁 ■3360円

ラテン語図解 辞典

古代ローマの文化と風俗
水谷智洋(編著)
見出し語約500。挿絵約700。古代ローマの風俗・習慣に関わるラテン語句を挿絵付きで解説。
四六判 372頁 ■3360円

「なんで英語やるの?」の戦後史

《国民教育》としての英語、その伝統の成立過程
寺沢拓哉(著) (2月下旬刊行)
英語はなぜ事実上の必修教科となったのか。教育社会学的手法による斬新な英語教育論。
A5判 300頁 ■予価2940円

研究社 TEL 03(3288)7777 (営業)
http://www.kenkyusha.co.jp
*価格は5%増込